

# スタートアップ成功の本質とは? 2018年 北海道大地震に学ぶ

日本テクノロジーベンチャー  
パートナーズ投資事業組合代表

**村口和孝**  
Kazutaka Muraguchi

## 9月5日、札幌に着けるか?

2018年の台風のコースは異常で、直撃数が多く、かつ大型だ。なぜか私の故郷に向かってくる。私の故郷徳島県海陽町が、一体何回NHKニュースで実況中継されたかわからない。

4日火曜日、25年ぶりという超大型台風21号が、

畠頭徳島県南部に上陸し、関西国際空港が浸水、タンカーが連絡橋に衝突して海外旅行者が大勢空港に取り残された。東京はもうすでに雨で、

その夜の銀座で会うはずの投資候補の相手が、関西方面から新幹線の遅れで、時間通りに東京にたどり着けず、会食は時間を遅らせたスタートとなつた。この起業家を支援したいなと思い、話に夢中になつていても、台風は徐々に本州に近づいており、会食の終わるころには、豪雨になるかもしれないなかつた(ならずく済んだ)。問題は翌5日だ

った。その日は、北海道まで行つて、札幌証券取引所で午後3時に講演することになつていたからだ。

大型台風21号は、夜の間に被害を残しながら兵庫から日本海に抜け、依然強力な勢力を保つ

たまま北海道に向かつたために、午前10時半の羽田から千歳に向かう飛行機が、飛ばない危険があつた。ただ台風は日本海に抜けてスピードを上げたため、何とか5日午前中には北海道の西側を、

駆け足で通過してくれた。ネットで確認し、午前9時頃家を出て、予定通り羽田千歳便に乗つた。飛行機は大型台風が通過するのを追いかける

ように、奇跡的に予定通り北海道に着いた! ただ、問題は千歳から札幌への足だ。予定して

いたJR北海道は、台風の影響で全面的にストップ。いつ動き出すのか全くメドが立つていなかつた。北海道は中国人など観光客でいっぱいなのに、大型台風で交通が乱れ、ツーリスト会社など、

予定変更でさぞかし大変だろうな、などと思いつ

つ、他人ごとではない。慌てて、千歳から札幌までの高速バスの乗り場へ急いだが、皆考えることは

同じ。百メートルを超える長蛇の列ができていた。

これを待つていては、午後3時の札幌証券取引所での講演に間に合わない。私はすぐに判断して、すかさず事務局に電話して、予定の電車やバスではなく、列の短いタクシーで向かうことを了解してもらつて、高速道路で、札幌市内に入つた。

## 5日夜、起業家大谷喜一社長と

3時から、北海道のベンチャーに対し、いかに情熱をもつて創業支援すべきか、アインファーマシーズやDeNA、さらに6月に上場したばかりのIPSなどの創業支援体験の困難について講演を行つた。北海道にどれだけ大きな潜在的な可能性があるか力説した。5時半から近くのホテルで受講

千歳空港を出る道路は渋滞していて、最初心配したが、出口から先は、思いのほか順調に走つた。たゞ、5日午後1時半ごろには札幌市内につい

たため、ゆつくり昼ご飯を食べられそうになつたため、ススキノの鮨屋でランチに舌鼓を打つた。やつぱり札幌は、食材が新鮮で美味しい!

歩いて中国人観光客であふれる狸小路沿いのホテルにチェックインし、大通りに近い、札幌証券取引所の講演会場に散歩しながらたどり着いた。大型台風が来て危ぶまれたのに、予定通り講演ができるなんて、信じられなかつた。一つ間違えば、今頃まだ東京にいたかもしれないし、千歳空港で足止めを食らつていたかもしけなかつたのだ。

者の二十代の若手証券や札証関係者たちと立食パーティーをした。8時頃バーにて会場を後にし

て、もしやと思い、久しぶりにアイソファーマンシズ大谷喜一社長に携帯で電話した。

これも全くの嬉しい偶然だったが、いつも東京にいる大谷喜一社長が札幌にて、近くで会食が終わつたばかりだというではないか！「村ちゃん、久しぶりだな、元気でやつてるかい？今札幌グラ

ンドホテルを出るところさ。たまには、そのふじ（社長の幼馴染がやつているカラオケバー）で30分でも一緒に行かないかい？」ということで、懐かしい店拓郎、井上陽水などの歌をリクエストされて歌い続け、思い出の消息話をしたり、亡くなつたアイソフアーマンシーズ顧問野尻さんに歌を捧げようなどが経つていた。久しぶりの札幌に超大型台風をしり目に何とかたどり着けて、予定していなかつた大谷社長と初めてゆつくりプライベートで酒を飲めるなんて、人生良いことがあるものだ、と思つた。

別れて、歩いて狸小路のホテルにたどり着いた。

明日6日はジンギスカンか札幌ラーメンか、北海道らしい美味しい昼ご飯をゆつくり食べ、午後1時半の千歳便で東京に帰り、夕方の仕事に間に合えばよいのだ。さらに東京で一泊して、明後日7日は徳島に入り、8日スタートアップキャンプ基

調講演で、「ステイアブ・ジョブズに君もなれる創業10ステップ」を話す。どんな起業家や若者と会えるだろうか。シャワーを浴びて寝た。

## 6 日午前3時大地震遭遇

18年9月6日午前3時、「クウーツークウーツークウーツー」つと、突然緊急通報が、ホテルの館内を響き渡つた。その瞬間、ベッドの上で体が、ガタガタッ、ガタガタッと、強烈に左右に振られる。これは東日本大震災で体験した以来

の大地震だ。一体東京のみんなは大丈夫か、でも、あれ？ここは札幌のはずだよな、と半分夢の中で、慌ただしく報道され始めていた。報道するアナウンサー自身も今まさに起きて、情報が少ない中「只今、北海道で大きな揺れを感じました！」と叫んでいた。地震の衝撃から30分もしなかつた

ろうか、突然、TVの画面が消え、停電した。と同時に、ホテルの天井の緊急非常灯が点灯し、ベッドが眩しくなつた。

ホテルの部屋は4階で、ドアの近くにたまたま非常階段があつて、中国人たちが大きな声で話しながら階段を下りていく。外へ出る方が危ないだろう、と思いながら窓から外を見ると、街は信号も消え、真っ暗。自動車のランプだけが明るく、狸小路を外国人観光客らがスマホを見ながらウロウロしていた。

## 6 日朝6時半、食糧確保

### 6 日午後、 小樽でフェリーダメ、レンタカーダメ

非常灯の眩しさと戦いながら数時間、寝て起きるが解がない。6日夜小樽出発で、京都舞鶴行きのフェリーがあるから京都まで行けば、7日中に徳島に着くかもしれない。古い札幌の友人に

め、ラジオアプリでニュースもよく聞けた。千歳が建物も一部壊れ、閉鎖、停電解消はしばらく先だという。まずい、いつ北海道を出られるかわからない。7日徳島入りは見通しすら立たない。

そこで、食糧の確保に動いた。ホテルの一階のコンビニへ行つてみると、薄暗い店内すでに長蛇の列となつていて。店員は懐中電灯を棚に縛り付け、POSシステムが動いていないため電卓で計算し、現金だけで在庫を販売していた。ノロノロしか処理できない。私も、念のため一食分くらいの、パン、弁当、お握り、大型の水のペットボトルをカゴに入れ、列に並んだ。私が買うころには列はさらに長くなつており、数時間後店の前を通りかかったら、店は閉店していた。

さらに、午前中情報を集め、北海道脱出に日かかるかもしれないことを考えると、もう少し食事が必要だと判断し、狸小路から西に数百メートル歩いた先のコンビニに追加の買い出しに行き、さらに二食分くらいの食糧を確保して、ホテルに帰つて来た。幸い、スマホの充電バッテリーと、ガラケーの携帯電話を持っていたので、大事に使えば、電池は一日くらい大丈夫だと思った。

何とか7日中に徳島に行きたいが、その方策を探るが解がない。6日夜小樽出発で、京都舞鶴行きのフェリーがあるから京都まで行けば、7日中に徳島に着くかもしれない。古い札幌の友人に

頼んで、信号の消えた街を小樽まで行つてもらつたら、すでに60人キャンセル待ちで乗れそうになつた。すると、レンタカーで青森の対岸の函館まで行こう、と思つて交渉したが停電でシステムが落ち、新規はどうしても貸せないと言つた。

それでは中古車を買えばよいと動いたが、これもダメ。携帯電話も電波が切れ切れで心もとなくなつてきた。ホテルに帰り、固定電話にかじりつき、東京経由で脱出方法を模索した。6日夜8時頃、何とか7日朝、札幌から300キロの函館まで自衛隊出身の古い知り合いの車のチャーターに成功した。そこから先、函館から漁船で青森まで行く方法も考えたが、ダメだった。

6日夜10時頃、東京の友人に頼んで、時々ネットで出ては即消える空席をクリックし続けて数十分やり続け、7日夕方函館羽田便を一席確保。ただ、これだと7日中に徳島入りは無理。さらに数十分何回も空席クリックに失敗した後、7日1時半旭川発羽田便を確保。300キロ離れた函館から、150キロ離れた旭川に車の行き先を変えてもらい、札幌で予定外の一泊をして7日朝には、ようやく札幌のホテル周辺は停電解消した。

7日朝、車で札幌を出立して、昼前、旭川空港に到着できたが、旭川はまだバスも通つていなくて、空港内は長蛇の列。機内に乗り込んだ。

## 7日午後、羽田乗換で全力疾走

これまで7日夕方徳島まで入れると思つて、旭川

空港で飛行機に乗り込んだら、機長から機内放送があつた。「この機体は、緊急の患者を乗せてからの出発となります。」何と!結果、40分遅れて羽田に向かつて出発したために、羽田に着いた時には、徳島乗換便はすでに出発した後だった!

ただ、そんなこともあるかもと、次の航空会社他社便を予約だけ入れていたのだ。ただし、10分で他社のゲートまでスタッフと一緒に走らないといけないと言う。羽田空港内の旅客ターミナルを繋げている私鉄のホーム脇の通路を全力疾走した。こんなに走つたのは何年ぶりだ。一緒に走つたのは20代の女性地上スタッフだったが、仕事とはいえ、ほんとに彼女の伴走がなければ、飛行機には乗れなかつた。分かれた時に感謝の握手をしたが、彼女は汗びっしょりだつた。

ようやく、7日夕方、予定通り徳島まで到着して、翌日の基調講演に間に合つたのだった。徳島の人達は、私が予定通り来たために、何もなかつたかのように和やかに笑つて迎えてくれたが、私にとって、徳島到着は奇跡としか思えず、しばし振り返つた。

## 「飛躍の経営」への気付き



著者略歴

日本テクノロジーベンチャーパートナーズ投資事業組合  
代表 村口和孝  
『むらぐち かずたか』

1958年徳島生まれ。慶應大学経済学部卒。84年ジャフコ入社。98年独立。日本初の独立個人投資事業有限責任投資事業組合設立。06年ふるさと納税提唱。07年慶應ビジネススクール非常勤講師。社会貢献活動で、青少年起業体験プログラムを、品川女子学院、JPX等で開催。投資先にDeNA、IPS、PTP、モーデック、グラフ等がある。

なくても、何とかそれなりの結果にたどり着く道が開ける」という、本質に目を開かされた、人生で忘れない事件となつた。

さらに起業家は、危機を乗り切ることをきつかれ、それを節目に、それまでの経営を単なる過去からの成長軌道から、不連続的にジャンプする、異次元へ飛躍する転機とする。つまり大きな危機を乗り切る体験は、自分自身を未知の領域に飛躍させるチャンスなのだ。偉大な起業家は、既知のエビデンスで固めた組織的「成長の経営」よりも、未知の偶然や他人との縁によって生まれる天与の機会をきっかけに発展する「飛躍の経営」を大事にしている、と気付かされたのである。

私が徳島スタートアップキャンプでこの話をしたのは言うまでもない。だからこそ、危機を受け入れ、向き合い、全力で考え、行動して結果を出し、自分の可能性に気付き、すべてに感謝出来る謙虚な起業家こそ、本物の起業家なのだ!